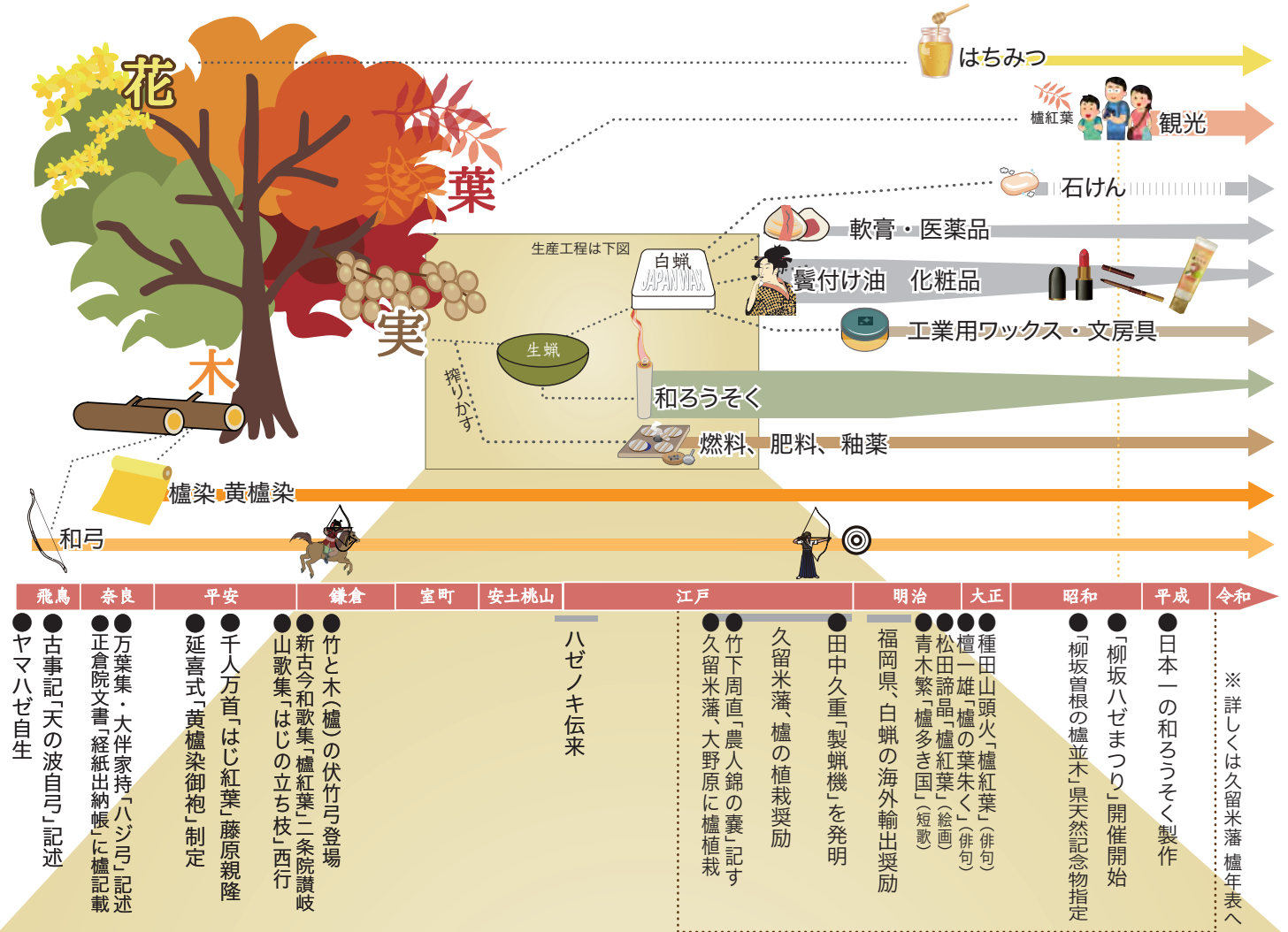


時代の流れで見る蠶の活用

日本では古代より蠶を活用してきました。ハゼノキの伝来以降は、活用範囲も大きく広がり、木材から、実、葉、花にいたるまで、樹木全体が活用されています。



はぜろう 蠶の生産工程

蠶の実収穫から製品ができるまでの工程。
現在、白蠶の用途の広がりが、注目されています。

※現在主流の溶媒による抽出。従来の圧搾(蒸す→圧搾)に比べ格段に蠶の抽出率が高くなった(撮影工場：みやま市 荒木製蠶(株))。



久留米の櫨はぜのものがたり

櫨栽培の夜明け

古来より日本にはヤマハゼが自生していました。天正年間（1573～1592）になると果実に含まれる蠟分の多いハゼノキが大陸から伝来し、蠟燭の原料として、薩摩を中心とした地域で栽培と製蠟が始まりました。

日本でも降水量が豊富で温暖な地域は、質の高い櫨蠟が採取できる適地でもあったため、栽培地域は次第に広がっていくことになりました。（左図）

享保の改革（1716）の殖産興業政策の一環として櫨栽培があげられたことで、久留米藩でも享保15年（1730）竹野

郡亀王村の庄屋・竹下武兵衛周直が先

んじて櫨を植えました。享保17年（1732）、享保の大飢饉を契機に、周直は天災に強く人手がかからない上に高値がつく櫨に注目し、寛延3年（1750）、「農人錦の囊」を書き、それが広まったことで、櫨の栽培技術が格段に進みました。

後に周直は優良品種「松山櫨」を発見し、さらに小郡の内山伊吉による「松山櫨」を改良した「伊吉櫨」が普及しました。

櫨苗木生産で培った植木苗木の育成技術は他の樹木生産にも及び、やがて久留米は植木苗木のまちとして全国に知られるようになりました。

久留米の主要産業へ

櫨の実には仲買を通じて集められ、「板場（工場）」で圧搾して櫨蠟を抽出し、筑後川を下り、さらに上方へと運ばれて莫大な利をあげました。

幕末になると久留米藩の財政は悪化しましたが、藩は櫨蠟などを専売制にすることで、大きな利益を上げました。小郡市史によると、明治3年（1870）の櫨蠟生産量は960万斤、36万両の売上をあげています（同時期の久留米の藍は約25万両）。蠟産業の中心地である吉井では、櫨によって生まれた資金を「吉井銀」、小郡では「小郡銀」と呼び、蓄積された富によって銀行業を興すものも現れました。

櫨の衰退

明治時代になると、電灯の普及や断髪令によって、和ろうそく・鬢付け油などの櫨蠟の消費が低迷し、加えて安価な外国産パラフィン蠟の輸入により、櫨の価格は下落しました。政府は外貨獲得の必要上、より高価な茶、桑（養蚕）などへの転換を奨励したものの、一方で各地で櫨の同業者組合が設立され、白蠟の品質向上と海外輸出も盛んに行われました。

全国的に見ると、櫨蠟生産と海外輸出は、明治後期から大正初期をピークに次第に減少し、太平洋戦争後の農地改革、その後の高度成長期に筑後地域の多くの櫨は伐採されてしまいました。

櫨紅葉

櫨産業が衰退した現在でも、筑後地域には2つの櫨並木が残っています。これらの櫨並木が残った理由のひとつは、美

しい「紅葉」です。櫨紅葉は筑後の人々のこのころの風景として、絵画や文学にも表現されました。

柳坂曾根の櫨並木では、香月徳男氏らの尽力で保存活動が始まり、現在でも「柳坂曾根の櫨並木保存会」や久留米筑水高校の生徒達によって毎年櫨並木の剪定や施肥、草刈りなどの保存への取組が続けられています。そして秋の「ハゼまつり」には多くの人々が訪れてその景観を楽しんでいます。

櫨の活用から保存へ

これまで日本人はヤマハゼ、ハゼノキと、櫨を様々な用途に活用してきました。主力は実から採れる蠟ですが、木材も和弓に求められる優れた反発力を持っています。染色では天皇の公式の衣「黄櫨染御袍」に使われ、花から採取される蜂蜜は、養蜂家から高く評価されています。また筑後地域一帯では蠟の搾りかすを燃やして藍甕の保温用を使うなど、櫨は天然素材としてのサステナブルな特性が見直され、樹木全体が活用されています（左頁）。

このような櫨の幅広い魅力を伝えるため、平成19年（2007）より、「松山櫨復活委員会」では櫨のろうそく作りや保湿クリーム作りなど、「久留米まち旅博覧会」を中心に活動してきました。この活動は、「筑後川櫨のあかりを灯す会」としても、今後広がっていく予定です。

長い歴史を経てきた先人の知恵に学びつつ、新たな時代ならではの角度から見つめ、櫨の幅広い活用を行う。そのことで、今後も櫨を保存し、次世代に繋いで行けるのではないのでしょうか。

はぜ
櫨とは 櫨はウルシ科ウルシ属の落葉高木で、代表的な品種として、以下のように日本古来から生育しているヤマハゼと、大陸から伝来したハゼノキの二種類がある。



ヤマハゼ 日本古来からの自生樹木。小葉が長細く、全体的に毛があり、実是小さく蠟分は少ない。



ハゼノキ 別名リュウキュウハゼ。大陸より伝来。実の表面は光沢があり無毛。実は大きく蠟分が多い。櫨蠟の原料として広く栽培された。

ハゼノキ栽培の適地

櫨は豊富な降水量と温暖な気候を好む陽樹である。また蠟の成分に「日本酸」を含む実を収穫するためには、北緯30～36度、年平均気温が約15℃以上が推奨される。この条件にあてはまる地域は江戸時代に櫨が植えられた地域とほぼ重なっている。

